



東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ
The East Asian-Australasian Flyway Partnership (EAAFP)

国内ツル類コーディネーター通信 第8号

2025年8月



ツル類国内コーディネーター 松本文雄 (日本ツル・コウノトリネットワーク)
〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒25線4番2 日本ツル・コウノトリネットワーク事務局
e-mail matsumotobun@gmail.com

○2024-2025年のツルの越冬状況

・出水のナベヅル・マナヅル

2024年10月18日にナベヅル7羽、クロヅル1羽、カナダヅル1羽の初渡来が確認されました。出水ツル保護会による羽数調査は4回を予定されていましたが、天候不良のため、11月30日と12月21日の2回のみ実施されました（下表参照）。また、1月16日にマナヅルカウント調査を行い2,992羽を確認しました。その結果、2024年度の推定渡来数は14,972羽となりました（ナベヅル12,036羽、マナヅル2,922羽、クロヅル8羽、カナダヅル4羽、ナベクロヅル2羽）。

標識ツルはナベヅル9羽、マナヅル3羽の12羽が確認され、捕獲地別では中国5羽、日本5羽、ロシア1羽、モンゴル1羽でした。

11月16日に回収された死亡ナベヅル成鳥1羽から、高病原性鳥インフルエンザH5N1亜型が確認され、シーズン中に35羽の感染個体が見つっています（ナベヅル32羽、マナヅル3羽）。

2025年1月22日にナベヅル32羽の北帰行が確認され、3月末までに14,000羽を超えるツルの北帰行が観察されました。（出水市の報告より）

・周南市八代のナベヅル

2024年は10月31日に成鳥2羽が初渡来しました。その後、11月20日までにヒナ1羽連れが3家族、単独

個体1羽が渡来し、12羽（うち幼鳥3羽）で年を越しました。2025年2月21日に新たに1羽が飛来し13羽となりました。昨年は7羽と一桁まで減少し、心配されましたが、少し回復した様子です。3月29日に13羽すべてが飛び立ち、北帰行を開始しました。

八代では3羽のナベヅルを継続飼育中で、野外放鳥などはありませんでした。（周南市の報告より）

・北海道のタンチョウ

北海道が行っているタンチョウ越冬分布調査の第2回調査が2025年1月22日に行われました。昨年に引き続き1月23、24日の2日間が補足調査日として設定され、調査の精度を高めています。その結果1889羽（うち幼鳥は162羽）が確認されました（ほかに飼育個体が38羽）。昨年より560羽も多く、過去最高数だった2021年度の1525羽をも上回る、過去最多の確認数です。地域別では釧路地方が1429羽で最も多く、次いで十勝地方が324羽、根室地方が114羽、日高地方が20羽、胆振地方が2羽で、オホーツク地方では確認されませんでした。正富宏之先生は「12月調査(976羽)の2倍の羽数となったが、主要越冬地の積雪量が極端に少なかったため耕作地や草地で採餌するタンチョウが目撃されやすかったと思われる。12月の調査と同様、分布領域の拡大が確認された」とコメントしています。昨年度から急増したわけではなく、

	実施日	ナベヅル	マナヅル	クロヅル	カナダヅル	ソデグロヅル	ナベクロヅル	総数
第1回	11月2日	雨天のため中止						
第2回	11月30日	12,036	948	4	3	0	1	12,992
第3回	12月21日	8,998	1,917	8	3	0	2	10,928
第4回	1月12日	雨天のため中止						

表 2024-2025年度 ツル羽数調査結果（出水ツル保護会）

調査精度の向上により、より実数に近い数値になったと考えられています。ただ、オホーツク地方でも越冬している個体はそのほかの調査で確認されており、まだ、見落としはあると思われます。

○2024年度の野生タンチョウの收容状況

2024年度の北海道のタンチョウの收容個体は53羽で昨年度と比べると9羽の増加となりました（下図）。

收容原因としては、「交通事故」が20件と最も多く、次いで「不明な衝突」5件、「列車事故」3件の順でした。なお、「交通事故」は9年連続でタンチョウにおける最大の收容原因となっています。

また、10月22日に標茶町で回収された1羽と11月1日に清里町で回収された1羽から高病原性鳥インフルエンザへの感染が確認されましたが、大規模な発生はありませんでした。

（環境省釧路自然環境事務所 2025年5月30日発表）

○シンポジウム「道東に舞い戻るタンチョウ」開催

2025年3月22日に環境省主催のシンポジウム「道東に舞い戻るタンチョウ」が北海道大学で開催されました。新たな生息地として期待される道央地方の市民を対象に、人とタンチョウとの共生について考える内容でした。

最初に環境省から北海道のタンチョウの分布状況について説明があり、続いて基調講演として、北海道鶴居村の大石正行村長が「鶴居村のタンチョウのこれまでとこれから「北海道のタンチョウ」へ向け」という題目で講演しました。鶴居村は「ツルと共生する村づくり」に村を挙げて取り組んでおり、村民主体の委員会を立ち上げ、保護・農業との共生・観光振興など、さまざまな側面からツルと共生する村づくりに取り組んでいます。

続いて、基調講演の二つ目として北海道大学大学院の久井貴世准教授が「古文書から探る道央のタンチョウと人とのかかわり」という題目で公演されました。過去の文献の記録からタンチョウの分布や人とのかかわりについて研究をしている久井氏からは、江戸時代には全国的に分布しており、特に道央圏には広範囲に湿地帯が残っており、ツル類の記録が多く残っていることなどの話がありました。

その後、環境省釧路自然環境事務所の岡野隆宏所長のコーディネートで、大石鶴居村長のほか長沼町の齋藤町長、日本航空北海道支社の林支社長、タンチョウ保護研究グループの百瀬理事長によるパネルディスカッションが行なわれました。

パネルディスカッションでは、長沼町の齋藤良彦町長から長沼町における取組が紹介されました。長

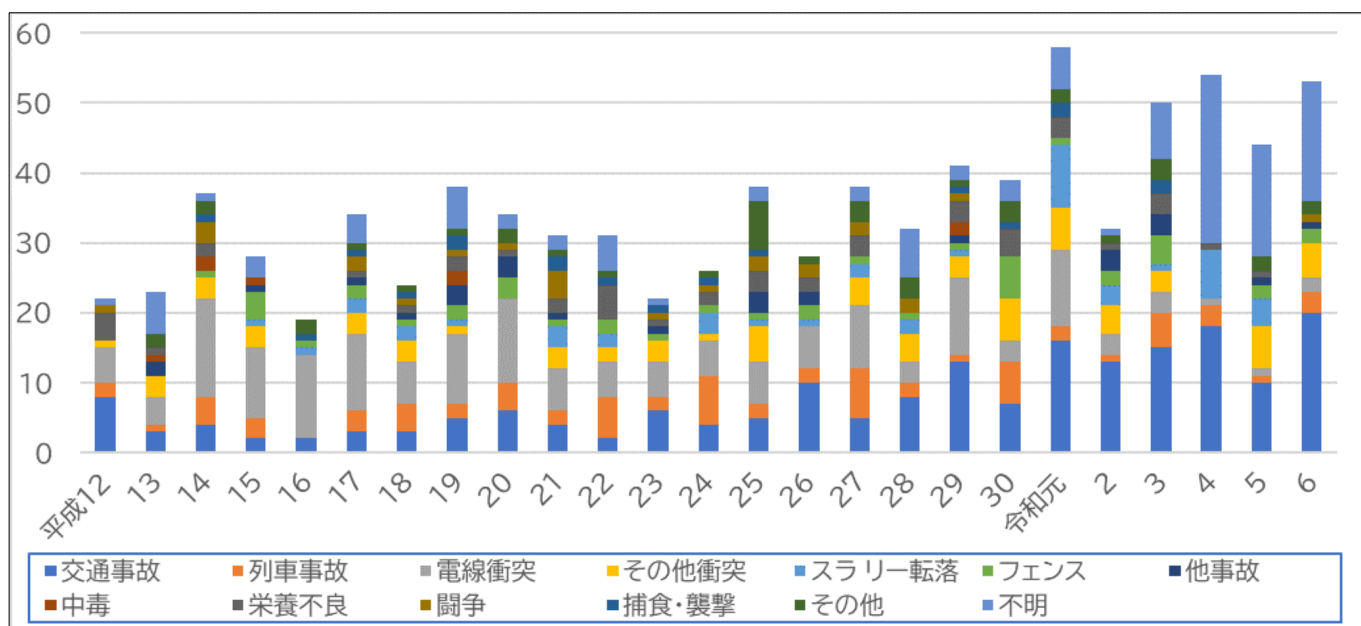


図 平成12～令和6年度 タンチョウ年度別・原因別收容件数 (環境省)

沼町でも「タンチョウも住めるまちづくり検討協議会」を組織し、町内の舞鶴遊水地を管理する開発局や地域団体が「タンチョウとの共生」に向けて協議を進めています。遊水地ではここ数年繁殖に成功していることや、鶴居村や日本航空と連携した取組などが話されました。

日本航空の林浩一北海道支社長からは、コロナ禍の時、長沼町の農家さんが手掛けた日本航空を激励する畑文字に感謝し、その縁で長沼町との交流がはじまった経緯が紹介されました。その後はスノーアートづくり等の地域活動に積極的に参加していて、地域資源になりうるすばらしい自然は旅行目的の重要な要素になるため、旅行会社としても大切にしたい、また生物多様性の保全は持続可能な社会の実現に不可欠であり日本航空としても重視していきたいとのお話がありました。

タンチョウ保護研究グループの百瀬邦和理事長からは、専門的な知見から生息地分散の現状等の説明や、タンチョウの存在が地域住民の生活に豊かさをもたらすなど、経済面だけではない利点を示されました。

道央地区では長沼町の舞鶴遊水地だけではなく、いくつかの遊水地でタンチョウが確認されるようになっていきます。タンチョウの道央圏への定着は生息地分散に大きく貢献すると思われるので、「共生」の視点で対応されることを期待したいです。

○ツル関係ニュース

・択捉島、紗那郊外で2羽のタンチョウを確認

北方領土特急便 2025年5月23日

<https://hoppou.blog/etorofu-nature-3/Facebook>

国後島でタンチョウが増えている話は、時折ニュースになっているが、択捉島まで飛んでいった話は、少なくとも最近では聞いたことがない。2010年頃、ウルップ島に飛来したこともあるというが…

択捉島クリリスク(紗那)郊外で2羽の美しいタンチョウ

ウが目撃された。まだ頭に赤い帽子をかぶっていないことから判断すると、若い個体ようだ。道路からほんの数十メートルほどのすぐ近くでエサを探していた。車から降りて写真を撮ろうとする人々には興味がないように見えたが、必要以上に好奇心を示すと、タンチョウは飛び去って行った。(択捉島の地元紙「赤い灯台」2025/5/22)



・WWFジャパン、マナヅルの繁殖地モンゴルで水質保全に取り組む 「人と自然の共生」へ

産経新聞 2025年6月13日

<https://www.sankei.com/article/20250613-N3EAPK4UGBFTVMPFTTFHGOKKSU/>

公益財団法人「世界自然保護基金ジャパン」(WWFジャパン)は、越冬で日本に飛来する渡り鳥「マナヅル」が繁殖地・モンゴルで営巣する水辺を保全するための活動に取り組んでいる。現地では気候変動や草原での家畜の過放牧により、マナヅルの生息環境が悪化しているためだ。WWFジャパンは2024年からWWFモンゴルと連携し、マナヅルと遊牧民が共存



水辺に近い草原でたたくマナヅルの親鳥とヒナ = モンゴル東部 © Staffan Widstrand / WWF

できる環境づくりに向けた支援を求めている。

推定6700～7700羽の絶滅危惧種

WWFは世界100カ国以上で活動する環境保全団体。生物多様性の豊かさの回復や、地球温暖化対策などに取り組んでいる。

マナヅルは春夏にモンゴル東部、ロシア東部、中国東北部で繁殖する。秋冬にかけて中国南部、朝鮮半島のほか、鹿児島県北西部の出水市などの九州地方に飛来して越冬する。推定6700～7700羽の絶滅危惧種で、特にモンゴル東部の個体群は著しく減少している。

渡り鳥を担当するWWFジャパン淡水グループの羽尾芽生さんは「2000キロもの壮大な距離を移動するマナヅルは、繁殖、渡り、越冬のために、特定の地域の湿地などに集まる傾向がある」とし、「渡りのルート上にある各国が協力し、種や生息地の保全に取り組む必要がある」と強調する。

遊牧民と話し合い共生を模索

WWFは首都・ウランバートルから東に約600キロ離れた「ハル・ヤマー自然保護区」にある草原地帯で活動している。小さな湿地や湖が点在するが、気候変動で減少が懸念される限られた水辺にはマナヅル以外にも、遊牧民の家畜が多く集まり、ヒナや卵の被害、水質の悪化といった脅威にさらされている。WWFは遊牧民と話し合い、ヒツジなどの家畜の水場をマナヅルなどの野生動物の生息地から離すなど、共生を模索している。さらに、家畜の糞尿による富



放牧は遊牧民の大切な生業だ。モンゴルでは人口増加やヤギから採取する高級毛『カシミア』の輸出拡大などで家畜の数が増え続けている © WWF-Mongolia

栄養化で水源の水質が悪化すると、人間の飲料水にも悪影響が及ぶため、こうした現状も遊牧民と共有しているという。

羽尾さんは「自然と共に生きる遊牧民は水源の現状にも詳しく、WWFが目指す『人と自然の共生』にも理解してもらっている」と印象を語る。ヒツジやヤギは別の水場に誘導されているが、ウマやウシなどは自由に動くので、遊牧民の理解を得て、マナヅルの生息地の水場をフェンスで囲う活動も行っている。



WWFが保全するハル・ヤマー自然保護区のフルスタイ湖。湖を囲む約1.5ヘクタールに柵を設置し、家畜の立ち入りを防いでいる © WWF-Mongolia

日本でも啓発活動や調査を実施

WWFジャパンは、モンゴルでの保全プロジェクトのほか、日本国内での啓発活動や、病気の感染を避ける目的で日本における越冬地の分散化に向けた調査などを担っている。

支援は、WWFジャパンの特設サイトに寄付額や必要事項を入力し、クレジットカードなどで決済する。5000円以上を寄付すると、金額に応じて希望者にマナヅルをテーマにしたオリジナル返礼品の「ポストカード」「木製マグネット」「刺しゅうハンカチ」が贈られる（8月31日受け付け分まで）。

お願い

このニュースレターは環境省EAAFP事業推進業務のもとで、発行され、ツル類が生息する各サイトに配布しています。皆様の各地の情報を教えていただきたく思います。また、資料、イベントチラシなどを送っていただければ、この通信に同封して配布いたします。



東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ
The East Asian-Australasian Flyway Partnership (EAAFP)

国内ツル類コーディネーター通信 第9号

2026年3月



ツル類国内コーディネーター 松本文雄（日本ツル・コウノトリネットワーク）
〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒25線4番2 日本ツル・コウノトリネットワーク事務局
e-mail matsumotobun@gmail.com

◎EAAFP国内連絡会が開催されました。

2026年1月13日に東京都港区で今年度の連絡会が開催されました。環境省よりジンバブエで7月に開催されたラムサール条約締結国会議（COP15）や中国で10月に開催された日豪・日中・日韓二カ国間渡り鳥条約会議と4カ国全体会合、フィリピンで11月に開催されたEAAFP第12回パートナー会議について報告されました（全体版ニュースレターをご参照ください）。ツルに特化した情報はありませんでしたが、今後、詳しい内容が分かれば、お伝えしていきます。

◎EAAFP水鳥大会が開催されました。

2026年2月8-9日にEAAFPフライウェイ全国大会が鹿児島県出水市で開催されました。8日はエクスカッションでツル観察センターからツルの見学や、出水市ツル博物館クレインパークいずみで学芸員のガイドによる館内説明を受けました。



9日は早朝にねぐらからの飛び立ちを観察したのち、出水市ツル博物館会議室で講演会が開催されました。講演会については全体版ニュースレターで報告されていますので、ツル類に関する発表についてのみ詳しく紹介いたします。なお、事務局で聞いた発表をまとめたもので、発表者の確認は取っておりませんので、ご留意ください。詳しく内容を知りたい方は事務局（松本）までご連絡ください。

◎ラムサール条約湿地都市「出水ツルの越冬地」における保全と利活用

堀昌伸（出水市ツル博物館）

出水ツルの越冬地は2021年11月18日にラムサール条約湿地に登録されました。ツルのねぐらを含む478ヘクタールです。また、2022年には国内初となるラムサール条約湿地自治体にも認証されました。これは湿地の保全・再生、管理への地域関係者の参加、普及啓発、環境教育等の推進に関する国際基準を満たす自治体に対して与えられるものです。ラムサール条約湿地に登録されたエリアだけではなく、出水市全体として取り組みができるのが魅力です。現在では「ツルといきる。未来につなぐ」をキャッチコピーに、出水の物産のブランド化を進めています。

他地域との交流にも力を入れており、近年は台湾野鳥保育協会などと連携を深め、台湾や出水市での写真展の開催などを行っています。

ワイズユース取り組みのひとつとして越冬地利用調整を行っています。越冬期間には観光客にマイカー等の入域場所制限をお願いし、また、越冬地環境保全協力金をお願いしています。協力された方には光学機器の貸し出しやツル観察センターへの早朝入館などのサービスを提供しています。多くの方に理解いただき、昨年度は約880万円の協力金がありました。協力金は利用調整にかかる経費のほか、湿地の調査や地元子どもたちのツル研修などに活用されています。今後も子どもたちに郷土愛を、市民には誇りを持てるような活動を続けていきます。

◎出水のツル類の現況

田島奏一朗（出水市ツル博物館）

出水では7種のツルの飛来の記録があり、今年も6種が確認されています（そのほかにナベヅルとクロヅルの雑種もいます）。出水はナベヅル・マナヅルの主要な越冬地で、併せて1万5千羽以上が越冬しています。国内ではほかに長崎県の諫早干拓でおよそ600羽、熊本県の横島干拓でおよそ30羽、山口県周南市八代でおよそ10羽の越冬があります。

出水のツル保護は鹿児島県ツル保護会（会長は出水市長、事務局はツル博物館）が行っており、ねぐ

らの借り上げや管理、給餌、ツルの監視、農作物への被害対策などを行っています。越冬渡来数は年々増加してきましたが、2020年以降は分散化促進のため給餌量の削減が行われていて、今年は2019年度比で5割減となりました。2022年に高病原性鳥インフルエンザによる大量死があり、それ以降、ナベヅルの越冬数は減少傾向にあります。鳥インフルエンザ対策として、巡視による感染個体の早期発見、回収に努め、養鶏業者に関しては防疫対策を強めています。規制区域を出入りする車両の消毒や散水車による越冬地内の路面消毒も行っています。

韓国とマナヅル越冬数の共同調査も行っています。ここ数年、韓国内でのマナヅル越冬数が増加傾向にあります。ナベヅルについても同様な国際的な共同調査が必要と考えています。

博物館は学校などと連携した教育普及活動、イベント参加・企画、市民講座開催やツル保護活動への協力のほか、ラムサール関係の活動も行っています。ラムサールレンジャーとして、地元の子どもたちにツルだけでなく、湿地のさまざまな自然の体験学習を行いました。

今後の課題としては、ツルの分散化に向けて、給餌量削減の効果の検証や、鳥インフルエンザ対策、国内新規越冬地の形成への協力や国際間協力などが必要になると考えています。

◎フライウェイで繋ぐ国境を越えた地域交流

久保優・羽尾芽生（WWFジャパン） 満田實（日本野鳥の会熊本支部）

WWFジャパン淡水グループでは海外での取り組みとしてマナヅル・ナベヅルの繁殖地を支援、国内では越冬地の分散化に向けた活動を行っています。海外の活動としてモンゴルにおけるマナヅル繁殖地の保全に取り組んでいます。モンゴルでは過放牧による湿地の減少、水質汚染、牧羊犬による被害、また気候変動などで、営巣地に大きな影響が出ています。2024年にはマナヅルの繁殖調査を行い保全上の重要湿地を27か所特定し、対策としてマナヅル生息地への侵入を防ぐフェンスの設置や、地元の方とマナヅルと湿地環境の抱える課題の共有や普及啓発を行いました。今後は湿地環境の改善や、地域の子どもたちと協力したモニタリング活動を行っていきたいと考えています。

国内では熊本県玉名市にある横島干拓の調査や保全を進めています。農業が盛んな地域で、地元ではツルが増えることへの警戒感もあります。まずは地域への理解醸成を進めることが必要となっています。そのひとつとして、1月にWWFモンゴル・WWF香港

の人たちが玉名市を訪れ、日本野鳥の会が実施するツル学習会に参加し、交流を深めました。

横島干拓には毎年11月頃に20-40羽のツル（ナベヅル・マナヅル）が飛来し、2月まで滞在しています。水田で落穂や稲株の根、昆虫やミミズなどを食べており、給餌などはしていません。現在では横島干拓周辺まで利用域を広げています。2018年から日本野鳥の会と日本野鳥の会熊本支部でツル保全の取り組みとして地元への野鳥学習の支援を行っています。

◎日本における野鳥の高病原性鳥インフルエンザ感染と東アジア・オーストラリア地域フライウェイ 金井裕（日本ツル・コウノトリネットワーク）

昨年（令和6年）度の国内における高病原性鳥インフルエンザは野鳥では227例、家禽では51例が確認されました。他に海獣類でラッコが3例、ゼニガタアザラシ2例が確認されました。地域別では北海道と鹿児島県で多く、時期別には、秋と春に増加しており、北海道は春に集中しました。これは海鳥の大量感染が起こったためです。

大きな特徴として、春先に海鳥、カラス類の感染例が多かったことです。ツル類は大規模感染はなかったですが、継続して感染は続いています。一方、カモ類はすくなく、おそらく、感染しても発症しないためと思われます。

高病原性鳥インフルエンザは1996年に初めて確認されましたが、近年では状況が変わってきています。2008年頃までは越冬地域で高病原性のウイルスが存在していたと考えられますが、その後は水鳥の繁殖地に高病原性ウイルスが入り、全国で感染が起こる可能性があります。

給餌はさまざまな鳥の集中化を導き、感染リスクが高まります。極度の集中を緩和させるためにも大量の給餌は止めて、自然の食物の確保を進めていくことが必要です。また、感染個体の回収も重要です。

◎出水平野における鹿児島大学の鳥インフルエンザウイルス疫学調査の取り組み

江崎真南（鹿児島大学）

出水のツルのねぐらの水と死亡回収個体からウイルスを分離してウイルスの流行動態を調べています。

大量発生した2022-2023年シーズンは1505羽のツルが回収され、295羽について遺伝子検査を実施しました。発生当初の11月はほとんどが陽性でしたが、12月中旬ころから陽性個体は少なくなりました。この時に分離された株はその前年にイスラエルでクロヅルが大量死した時の株から派生した株とは言い難いものでした。また、出水市の9か所の養鶏場でも発生

しましたが、ここから分離された株はツルから見つかった株とは異なり、ツルの流行と養鶏場の発生には直接的な関連はないと示唆されました。また、気管の中のウイルス量が多かったことから、呼吸を通じて感染が起こった（経気道感染）と推測されました。流行終息後の回収個体の抗体検査から、終息後の集団に免疫が出来ていたとは言えないということでした。個体密度が減少したことや、死亡個体の回収により、終息したと考えられます。

2024年11月から2025年2月まで定期的にねぐらの水を検査しました。11月から高病原性の株が検出されましたが、12月中旬にいったん収まりました。ただ、1月から再び検出されるようになりました。そして、この二つの株は異なっていました。おそらく、1月から新たな株が出水に入ってきたと考えられます。今年度も同じような傾向が見られています。複数回のウイルスの持ち込みがあり、年明け後も注意する必要があります。

◎ツル類分散化に向けて気になる変化—収穫後の水

田環境—

田尻浩伸（日本野鳥の会）

地球温暖化対策が求められ、稲作に変化が求められています。メタン排出の多くが水田から起こっていると推定されています。水を張った水田では稲わらなどをもとにメタンが生成されるためです。その発生を防ぐために、秋耕や中干期間の延長などが推奨されています。

秋耕すると二番穂や落ちモミが埋まって、ツル類やカモ類の餌が減ってしまうという問題が生じます。そのような餌が減れば、キャベツやブロッコリーへの被害も増えるかもしれません。二番穂が実ってから秋耕すれば、それらの影響を軽減できるかもしれません。実際に二番穂の実る時期と重さについて調べました。それによると品種によって二番穂の量が異なることや同じ品種でも地域に寄って異なることがわかりました。早稲品種ほど二番穂が多く、稲刈りが早い地域ほど多く実らせられそうという事です。品種や地域ごとに秋耕の時期を工夫することで鳥への餌を残すことができるかもしれません。また、降雨などで田んぼに水溜まるとカモ類はそちらに集まります。このようなことも食害対策に使えるかもしれません。

ただ、農家へのコストは増えます。そのため野鳥保護を環境保全型農業のシンボルとして付加価値をつけていくことが必要です。共存のためにいろいろと知恵を絞っていくことが求められています。

◎タンチョウの生息地分散について

百瀬邦和（タンチョウ保護研究グループ）

世界のタンチョウの生息数は現在約6000羽と推定されています。これは国際タンチョウネットワークの集計によるもので、越冬期の集計において日本（北海道）に約2,200羽、朝鮮半島に約2,600羽、中国に約1,000羽と推定されています。生息数は増加しています。2019年のコロナ禍以降、中国で、飼育タンチョウを大量に放鳥したため、急速に増えています。国内でも緩やかに増えています。

繁殖地は40年前は道東地域（根室・釧路・十勝）でしたが、現在では道北や道央にも広がっています。1980年代から十勝地方での繁殖が増加し、2000年代から道北での繁殖が始まり、オホーツク地方でも増えてきました。2010年代に道央へも進出しています。

越冬地の分布も広がりました。かつては鶴居や阿寒といった給餌場に多くのツルが集まりましたが、近年は音別や中チャンベツといった給餌場でも数が増え、また、十勝地方や根室地方などの大規模な給餌を行っていない地域で越冬数が増加しています。現在、給餌場に集まっているのは60%くらいですが、幼鳥の割合とみると大きな給餌場がある以外の地域で幼鳥の割合が高くなっています。家族構成により動きに違いがあるかもしれません。

サロベツ湿原でツルに発信機を付けて追跡調査も行いました。道北から道東への移動ルート的一端が明らかになりました。今後も人との共存を目指していくことが求められています。

◎タンチョウとの共生を目指す地域活動へ

黒澤信道（鶴居村タンチョウと共生する村づくり推進会議）

鶴居村は酪農が主要産業で南に釧路湿原をもつ村です。大正時代にツルが再発見された場所であり、タンチョウへの人工給餌を始めた場所でもあります。

2018年に「鶴居村タンチョウと共生する村づくり推進会議」が立ち上がりました（会長：大石村長）。これは環境省が2015年から給餌量削減事業を始め、いずれは給餌や保護増殖事業の終了を検討していることから、村としてツルとどう関わっていくのかを議論することから始まりました。「タンチョウ鶴居モデル」の理念を策定し、その理念に基づいて、詳細を議論する場として推進会議を設立しました。

3つの部会（保護のあり方部会・農業との共生部会・地域振興と住民のかかわり部会）から成り、「保護のあり方部会」では鶴居村での適正な越冬羽数や給餌の方法の検討を、「農業との共生部会」では農業者と保護関係者の協力体制の構築や農業にプラスと

なる仕組み作りを、「地域振興と住民のかかわり部会」ではタンチョウ観察場所の環境整備とルール作りやタンチョウに係わる文化的活動の推進を協議しています。

伝染病対策や農業被害緩和のために集中の緩和を目指し、給餌に頼らないような自然採食地の創出などにも取り組んでいます。また、農業被害対策やタンチョウへの事故対策、観察・撮影場所でのルール作りなども行ってきました。子どもたちの環境教育活動だけでなく、村民への関心を高める活動にも取り組んでいます。越冬数調査や農業被害対策活動にも村民のボランティアを募集して、行政だけでなく、村民で取り組むような活動を行っています。

その後、総合討論が行われ、鳥インフルエンザの現状や対策について、質問や意見が交わされました。対策を適切に進めるためにも、早めにウイルスの侵入を把握することが大切で、環境省のマニュアルも改訂が必要だという意見もありました。また、ナベヅル・マナヅルの越冬地の広がりについても話になり、環境省から越冬地誘致の取り組みなどが紹介されました。最後に環境省川越課長から立場を超えた取り組みがフライウェイを強固にするために必要で、また、正しい情報を発信していくことも重要であると挨拶がありました。

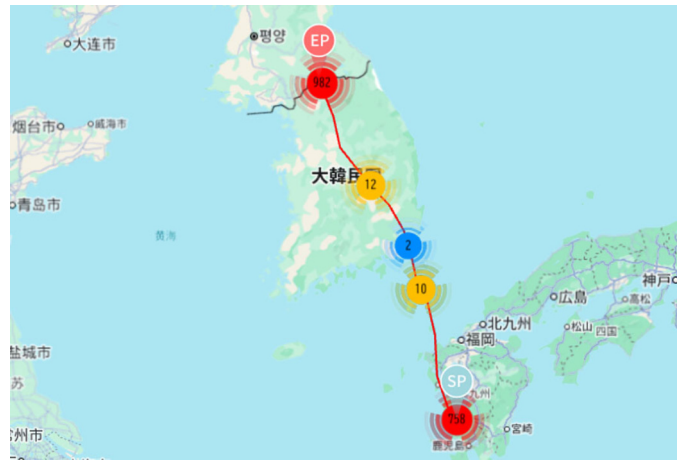
◎ツルが舞う空を見上げようプロジェクト（日本生態系協会）

（公財）日本生態系協会が「ツルが舞う空を見上げようプロジェクト」を立ち上げました。これはナベヅル・マナヅルなど冬に飛来するツル達の保全のため、ツルが安心して冬を過ごせる環境を複数の地域につくると共に、ツルと人が共にくらししていくための理解を深め、地域全体でうけいれていくための体制づくりを進めるプロジェクトです。

具体的にはツルのねぐら整備や、ツルに発信器をつけて、渡りのルートを探し、各地で連携してツルの生息地を守っていくことを試んでいます。発信器を付けたツルの渡りルートは一般に公開されており、多くの関係者に興味を持ってもらえるように取り組んでいます。

このプロジェクトでは、ナベヅル・マナヅルの目撃情報も広く募集しています。皆様のご協力をお願いします。詳しくはプロジェクトのホームページをご覧ください。

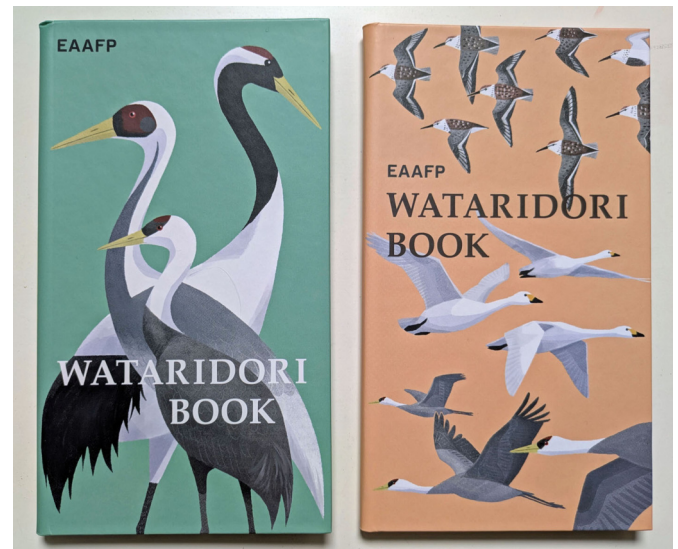
<https://soratsuru.jp>
Xでも最新情報配信しています（右のQRコード）



マナヅル（イズリア）の移動経路（日本生態系協会提供）

◎EAAFPのフィールドノートが作られました。イベントの賞品などでご活用いただけます。

EAAFPの理解促進・普及啓発に役立ててもらうために、ツル類と3種群をデザインしたフィールドノートを国内事務局が作成しました。各地でイベントを行う方々に活用していただければと思います。ご希望の方は事務局までご連絡ください。数に限りもありますので、10～20冊くらいを目安に考えておりますが、送付部数についてもご相談ください。無くなり次第終了となりますので、イベント等を企画されている方は早めにご連絡ください。



フィールドノートの表紙（左：ツル類版、右：全体版）。いわゆるコクヨの野帳（スケッチブック）と同じで3mm方眼紙40枚つづりです。ガンカモ版、シギチ版は各コーディネーターにお問い合わせください。

お願い

このニュースレターは環境省EAAFP事業推進業務のもとで、発行され、ツル類が生息する各サイトに配布しています。皆様各地の情報を教えていただきたく思います。また、資料、イベントチラシなどを送っていただければ、この通信に同封して配布いたします。